

第 31 回 2014 年 11 月 26 日(水)

ゲスト 宮田英和 (サンテレビ 取締役・総務局長兼経営企画室長)

テーマ 激震地の被災テレビ局は大震災をどう伝えたか

～阪神淡路大震災から 20 年～

主な内容

- ◎放送局が被災～阪神淡路大震災から 20 年～
- ◎「震度 6」慣れ 政府も初動遅れ
- ◎スクープ映像 長田区の火災
- ◎安住の地「家」が凶器に
- ◎午前 8 時 14 分 藤村アナが第一声～6 日間の震災報道～
- ◎通信網が絶たれ 情報入らず
- ◎災害有線電話を活用 少しずつ「点と点」が線へ
- ◎偶然が重なる 長田区火災のスクープ映像
- ◎水、電気、ガス どうなってんの 「生活情報」の伝達に絞る
- ◎「安否情報」と放送の役割
- ◎「生活情報」の表示はシンプルに
- ◎徹底した震災報道 独立局の強み
- ◎役立つ情報源 地元メディアが上位～被災者のアンケート～
- ◎阪神淡路大震災で学んだこと
- ◎避難所にテレビがない～停電に弱いメディア～
- ◎災害弱者 情報弱者への対応
- ◎被災者にとって「忘れられること」が最もつらい
- ◎災害情報のプラットフォーム化
- ◎「L 字型画面」で災害情報を流す その賛否は
- ◎私の思い メディアスクラム～神戸児童殺傷事件～
- ◎災害は“違う顔”でやって来る

司会 去年11月から始めた在阪民放の歴史的な番組の掘り起こし作業は丁度1年になりました。この1年間に、例会にご出席いただいた方を含めて約30人の方から話を伺っており、着々と原稿化が進んでおります。来年秋ぐらいは出版という段階になっています。

来年は、阪神淡路大震災から20年という節目の年になります。今日お集まりの皆さん方にもそれぞれに、(震災時)お仕事をなさっていて、あの阪神淡路大震災に対してさまざまな考えや記憶をお持ちだと思います。

今日のゲスト、宮田英和さんのサンテレビはご承知の通り、ポートアイランドの中にあって、まさに激震地の真ん中にあるテレビ局、震災の影響をもろに受けた放送局です。おそらく大阪、京都のメディアとは全く違った経験をされたのではないかと思います。地震直後、さまざまなご苦労があたりになったようです。

地震の発生時の放送、あるいはどんな風にして次なるステップに踏み出されたのか、そんなお話を伺いたいと思います。サンテレビ取締役総務局長 宮田英和さんにお越しいただきました。

「サンテレビ 阪神淡路大震災 被災放送局の記録～そのとき何を伝えたか」(平成8、1996年8月1日発行、185ページ)という記録をまとめられました。

今日は映像とスライドを使いながらお話して下さることになりました。

簡単にプロフィールをご紹介します。宮田さんは1955年のお生まれ、1979年大阪大学工学部のご出身で、サンテレビに入社されました。以来、報道畑一筋です。兵庫県警の記者クラブ、神戸市政記者クラブ、そして神戸経済記者クラブのキャップを務められました。1993年にはニュース担当デスク、そして阪神淡路大震災、それから神戸連続児童殺傷事件が起きたとき、担当デスクをしておられます。2005年にはデジタル化の担当、2011年にメディア戦略局長、2013年に取締役に就任、現在は総務局長と経営企画室長を兼務しておられます。まさに現役のお忙しい中を今日、来ていただきました。

<放送局が被災 ～阪神淡路大震災から20年～>

宮田氏 大先輩ばかりの席で私のような若輩がお話してもいいのかなと本当に恐縮しております。20年前といたしますと、私はニュースのデスクになって2年目で、うちのニュースをどうして変えようかと意気込んでいたときでした。そこへあの阪神淡路大震災の発生。これは、私の無力さというか、無能力さみたいなものを本当に感じさせた大きな出来事でした。それ以来、サンテレビという会社もそうですが、私個人はあの地震を契機に大きく変わりました。その辺のお話をさせてもらえたらと思っています。

(スクリーンに映像とスライドが映し出される)

まずサンテレビですが、カバーエリアが大阪と兵庫、大阪はもともと100%でした。

私どもは、サンテレビのPR コマーシャルとして「おっ！サンテレビ」という気持ち悪いマスコットキャラクターを持っています。今ご覧いただいているように、体は太陽の形、メガネをかけ、鼻の下にちよび髭をはやしている。2005年12月にデビュー、会社の宣伝映像として流しています。

それとプロ野球の阪神タイガース戦の生中継を3000試合させていただきました。これもひとえにみなさまのお蔭です。

今の「おっ！サン」というのは（キャッチコピー）、広告代理店と組んで、まさにねらいにいった“キモカワイイ”キャラの初代と言われていまして、全国的に人気があります。広告賞もかなり、ええところの賞をいただきました。最近はこれで売っております。そういう意味ではタイガースというのは一つの売りでして、視聴者層が高い、まさに「おっ！サン」というのが視聴者層で、高齢の方が多いということになります。つまり「情報弱者」、災害のときに弱者になられる方が多いということになります。サンテレビの視聴者の中に、そういう弱者の方が多い、私どもは今でもそういったことを自覚しております。

（阪神淡路大震災の震源と地震帯を示した兵庫県の地図を示しながら）

震源は淡路島のすぐ北部、黄色い地域は地震帯、揺れた地域です。赤く塗ったところが震度7の地域です。震度7というのを記録したのはこのとき初めてです。発生は午前5時46分、マグニチュード7.3。この地震で亡くなった人は6434人（負傷者4万4000人、全半壊25万棟、45万8000世帯）。

皆さんも、まさか6434人もの方が亡くなっていると思われなかったのではないのでしょうか。ただ阪神間に住んでおられる方は、自分の経験から、これは大きいぞと思われたかもしれませぬ。これは有名な話ですが、当初は京都の震度しか出なかったとか、大阪の震度でしか出なかったとか、実際、神戸は震度6というのが出たのですが、すぐに5に訂正されました。

<「震度6」慣れ 政府も初動遅れ>

東京のほうは特に緊迫感がなくて当時の村山内閣は午前5時46分の地震発生後、午前10時から定例閣議を普通にやっていたと聞いています。

その理由を、いろいろ調べました。この前年、1994年10月4日に北海道の東方沖で地震が起きています。このときのマグニチュードが8.2。最大震度6。（当時6の中に弱とか強とかいう分け方はなかったので6でした）。この地震ではエトロフで9人が亡くなったという風に記憶しています。もう一つ、1994年12月、阪神淡路大震災の20日前に三陸はるか沖と名付けられた地震が起きました。このときも、三陸沖でマグニチュード7.6、最大震度6。死者が3人という数字でした（被害は主に青森県）。これで「震度6」慣れと言いますか、東京のメディアも、官公庁もまた「震度6」という感じを受けたんだと思います。そういう意味では、初

動が遅れた。

一方、私たちサンテレビというか、兵庫県というか、関西というか、関西の官公庁、メディア、また一般の方々も、関西には地震が来ないという、何の根拠もない安全神話を信じて油断があったことも間違いない話です。

神戸は阪神大水害（1938、昭和 13 年 7 月、死者・行方不明 715 人）を始め、もともと水害の多い街で、水害対策とかはやっていましたが、まさか本社が被災して、構内労働者の 3 分の 1 しか出社できないような状況になるとは、全く想定していなくて、私どもの恥の一つです。

1995 年に、パソコンの OS「ウインドウズ 95」の日本版が 11 月に発売されている。DVD プレーヤーが 1996 年発売。携帯電話は 1994 年度末までに 54 万台ですから人口のわずか 3.8%にしか普及していません。この年 1995 年のデータはありませんが、翌 1996 年のインターネットの普及率は 3.8%というデータが残っています。つまり阪神淡路大震災があったときの情報伝達手段というのは、基本的に固定電話しかなかった。もう一つ、一般の被災者が、(災害時に早く) 情報を手に入れる方法は、放送しかなかったということです。電話がつかないということで、放送メディアしか頼りに出来なかった。ただ地震発生直後、放送メディアが被害をつかむことが出来ず、的確に情報を伝えられなかったというのは、一つの反省点であろうと思います。

あのときのことを思い出していただくために、少し映像を持ってきましたのでご覧ください。

<スcoop映像 長田区の火災>

(長田区の火災、午前中に撮影した長田の燃えさかる街の映像はサンテレビだけ。三宮中心部の惨状、高速道路の倒壊、壊れた阪急伊丹駅、阪神大石駅、再起不能といわれた神戸港、ポートアイランドの液状化被害など)

長田区は最も火災がひどかった場所です。被災した皆さんも、ぼーっと見ているだけ。まず断水で水が出ませんから、消防士もホースを手に呆然と見ているだけです。燃え広がるのを見ているだけというのが映像からもお分かりいただけると思います。映像で見ると暗いようですが、昼間です。青空が見えています。

三宮は、まさに空襲を受けたような惨状です。

有名になった国道 43 号線の高速道路倒壊現場。高速道路が横倒しになっているのを、下から撮った映像です。空撮の映像にも驚きましたが、下から見たときはもっと驚きました(この後、さらに映像の説明が続く)。

もう一つ見ていただきたいのは、救助活動がどうなっていたのか。三宮近辺、崩れたコンクリートの塊に挟まれて助けを求めているところが映像に記録されている。ところがジャッキも、つるはしも何もない。こんな状況の中で救助しようと、

人が集まってくるが、助けるすべがない。こんなケースが他にもあった。また病人を手当てしなければいけない病院が被災するという最悪のパターンもありました。ポートアイランドにある中央市民病院では、一時停電して、暗闇の中で心臓マッサージをしているところを撮りました。さすがにカメラマンもライトを照らしていない。病院の外で心臓マッサージをしている映像もあります。まるで野戦病院の状況でした。

淡路島の北淡町ではコミュニティーが発達しておりまして、隣の人がどこで寝ているのかまで把握していたということでした。このショッキングな映像、建物が壊れ、真ん中に挟まれている男性は皆さんのおかげで引っ張り出され、足を骨折したものの、助け出されました。

<安住の地「家」が凶器に>

こういった救助の状況から、阪神淡路大震災の特徴というのは、自分の安住の地、心の安らぎを求める家そのものが凶器になってしまった災害です。東日本大震災の場合は、生活の糧である海が凶器になった災害です。

1995年という年は、放送メディアにとって記憶すべき年です。関東大震災は1923年に起き、その2年後の1925年、わが国初のラジオ放送が始まる。ということは、1995年の阪神淡路大震災は、日本で放送が始まって70年目に起きた災害だということ。そういう意味で言うと、放送メディアが初めて経験した都市型の広域大災害で、以後、これ以上の広域大災害を経験することはないと思っていましたが、東日本大災害（2011年3月11日）もいわゆるスーパー広域災害で、これは放送メディアに与えられた一つの試練なのでしょう。

ポートアイランド（神戸港にある人工島）にある私どもの会社サンテレビの本社が被災した。放送しなければいけないテレビ局が被災したというのはおそらく初めてのケースだったと思います。

地震当日の社内の映像でもご覧いただきましたように、報道セクションの部屋はテープや書類入れが散乱して、足の踏み場もない状況でした。

第1スタジオ（222平方メートル）と呼んでいる大きなスタジオではセットが倒れ、スタジオカメラも3台中2台が転倒して、使用出来ませんでした。

ただニュース専用の第2スタジオ（50平方メートル）はセット、カメラ（3台）など転倒し、モニターも落下するなどの状況でしたが、強烈な余震の中、仮補修をして放送を続けることが出来ました。マスターがきちっとした耐震設計をしていましたので、何とか生き残って電波だけは出せるという状況でした。

<午前8時14分 藤村アナが第一声～6日間の震災報道～>

午前8時14分から地震情報を伝える特別番組に入ります。藤村徹アナウンサーの

第一声（顔出し）は「ここで地震に関するニュースをお伝えします。ご承知の通り、今朝 6 時前淡路島付近を中心に強い地震がありました。近畿地方に強い地震がありました」。

ここから私たちは、6 日間 CM なし、ぶち抜きで放送を続けました（1 月 17 日～1 月 22 日）。

私は当時、王子動物園から西側へ 500 ほど行った賃貸マンション（神戸・中央区）に住んでいました。山手幹線のすぐ北側です。

あの午前 5 時 46 分の揺れで、私自身はすぐに地震だと思ったんですが、そう思わなかった人も多かったようです。私は身を丸くしながら、倒れたタンスとテレビの隙間に挟まれ、かろうじて無事でした。妻と 3 歳の娘は隣の部屋に寝ていましたが、助けてという声がするので、何とか隙間からはい出して見に行くと、二人とも大きなタンスの下敷きになっていました。火事場の馬鹿力とよく言いますが、重いタンスを、一人でひょいと持ち上げているんですよ。今だったら腰を痛めるなという感じです。しかもすべての食器類が割れていますので、リビングにガラスの破片がいっぱい落ちている。そこをスリッパもはかずに、平気で歩いているんですよ。不思議なもんやと思いました。

そこで私の住んでいる地域の被害がいちばん大きいだろうと思い、会社に電話して、混乱した家の中を撮影させようとしたんですが、当然のことながら電話はつながりません。マンションのどこかで配線が切れているのではと、外に出ると、公衆電話のボックスがそのまま倒れているんです。ああこれはあかんと、どうしようもないので、自分の車で会社に行こうとするんですが、余震が続く中、妻と娘を乗せて、まず会社に向かう、その後妻の運転で、実家のある神戸・北区まで帰るという作戦に出ました。

ポートアイランドというのは、ご存知だと思うんですが、神戸大橋で陸地とつながっているんです。私が行ったときは、ちょっと遅かったんでしょうか、すべての信号が止まり、大渋滞していました。特に 2 号線とか、43 号線を南北に渡るといのは至難の業で、仕方なく自分の車を止めて交通整理して、自分の車の番になったら戻ってちょっとだけ前へ進むという形で、普段だと自宅から会社まで車で 12～13 分、15 分もあれば間違いなく到着できる場所でしたが、1 時間以上かかりようやく神戸大橋の手前までたどり着きました。ほかのスタッフは神戸大橋が通行止めになる前に、自分の車で渡り切ったみたいで、私の場合ちょっと遅かったんだと思います。すでに神戸大橋は通行止めになっていて、仕方なく、嫁さんと子供とはそこで別れ、私は歩いて会社に向かった次第です。

液状化現象で水浸しになっているところをじゃぶじゃぶと歩き、会社に着けば、エレベーターは止まっており、今度は 11 階まで階段を上がっていきましたが、藤村アナウンサーの「第一声」の放送には、間に合いませんでした。

ニューススタジオのサブ（副調整室）に行って「来たぞ」と言ったんですが、当時の報道部長はいち早く駆けつけて、なぜかフロアーディレクターをしていました。その報道部長はパジャマ姿でした。パジャマのまま、着替えもせず息子をたたき起こして、息子の車で駆けつけたということです。それぐらいでない間に合わなかった。ここで私が「来たぞ」と言って、みんなが、おーと言ってくれたもののなんと恥ずかしいという思いがありました。

<通信網が絶たれ 情報入らず>

そこから先、私の苦悩が始まります。電話がつかないで、まず情報が取れない。共同通信から情報を受けるファクスもつぶれてしまって、何も流れてこない。当時、兵庫県は防災のため、衛星通信ネットワークを持っていました。これは全国でも画期的といわれていたんですが、これがなんと停電で止まってしまって衛星ファクスが機能しない。何のためにあった設備なのか分からない。しかも報道の部屋は棚から物が落ちて、足の踏み場もないぐらい混乱していて、電話を探すだけでひと苦労するありさまでした。

そんな状況の中でも、放送が始まったんですが、新しい情報が入ってこないため、放送内容は何もなし。同じことしか伝えていない放送が続きました。デスクの席に座っていてもサブへ原稿を持って行くことが出来ない。書くことが全くない。無力としか言いようがなかったということ覚えています。

一つだけ、当時兵庫県警は建て替え中で、ポートアイランドの中の庁舎に、仮本部を置いていて、広報セクションもそこにありました。そこにたどり着いた人間は少なかったんですが、サンテレビの場合、ポートアイランドに社員三人が住んでいました。先ほど第一声を放送したアナウンサー（藤村徹）と記者、もう一人は制作のディレクター（那須恵太郎）で報道経験のあるスタッフでした。彼がポートアイランドの仮庁舎に詰めてくれました。

ただそのポートアイランドの仮庁舎にもほとんど連絡が入ってこず、一人死亡とか、2人死亡とか、病院に5人運ばれたとか、今から考えるとケタが全く違う情報しか入ってきませんでした。

<災害有線電話を活用 少しずつ「点と点」が線へ>

災害優先電話というのがサブ（副調整室）にあり、それを使うと相手の電話が空いていると、優先電話なのでつながることになっているんです。そこでこれまで取材した人のアドレス帳を集めて、片っ端から電話していく。お宅の住所はどこですか。どんな状況ですか。周りはどうですか。というようなことを聞いていきました。

考えてみれば電話のつながるところは、被害が少ないということなんですが、ま

さにわらをもつかむというか、まさに「点と点を結ぶ」と何とか線になるのかなというイメージで、とにかく電話をかけ続け、情報を入れていきました。

【注】「サンテレビ『あの日 あの時』」これは 1995 年民間放送連盟賞の放送活動部門で被災者救援、復興キャンペーンなど一連の番組が入選したときに提出した資料の一部。情報が全く入ってこない初期の段階から被災者のニーズをつかみ、電話が殺到してくる経過がコンパクトにまとめられている。

- ①第一声
- ②点と点を結ぶ
- ③それぞれの記録
- ④地味な放送
- ⑤相次ぐ情報提供
- ⑥広がる被災者ニーズ

さらに技術スタッフやほかの部署のスタッフが徐々に会社に到着し始め、そして出勤してきたスタッフをスタジオに入れて、出勤途中に何を見たかなど生でしゃべってもらった。“あなたの出勤ルート”をまず言えと指示。

▼ 技術スタッフのスタジオレポート（1月17日午前11時7分）

「加古川から自転車を積んで車で名谷まで来て、長田を見てきた。木造家屋は全壊、火災がものすごい。生き埋めの人を家族が畳にのせて助け出そうとしていた---」（サンテレビ「被災放送局の記録」、1996年1月より）

ただ一つ困ったことに、当時は今と違って電子テロップがなく、紙に記録し、テロップにして放送していた時代です。ところがこのテロップの器械が壊れて使えなくなりました。仕方なしにやったのが、電話で話をしている人は誰なのかという表示を、フロアディレクターが手書きで書いて、カメラで映し出したのです。

<偶然が重なる 長田区火災のスクープ映像>

一方、西区に住んでいて、被害の少なかったカメラマンは自分の車を運転して、神戸大橋が通行止めになる前に、会社に一番に入ってくれていました。実はこのカメラマンが「午前中の長田の大火災」を撮影しているんです。偶然も重なりました。彼はまず、三宮周辺の被害を撮り、その映像（ビデオテープ）を本社に送らなければということで、自分で届けようとしたんですが、神戸大橋の手前に車を置いたまま、本社に帰り、徒歩で11階まで上がって、下りたりしていたら、長田に行けたかといえば、おそらく行けなかったと思います。彼はちょうど神戸の税関前（神戸大橋の手前）で、当時明石から自転車で出勤してきた報道の記者に偶然会います。その報道部に撮影済みのテープを託します。そ

してその報道部員から、長田で大きな火災が発生していると聞いて、西へ向かいます。

おそらく午前中の長田区の大火災（焼け落ちる商店街など）を記録した映像はサントレヴィにしかない映像だと思います。

それぞれの記録には、本当に今でも頭が下がる思いです。その当日の映像は、全部見ました。ワンカット、ワンカット今でも覚えています。

ところで社内の3分の1ぐらいしか出勤出来ていない状況の中で、これからどのようにして体制を整えていくか、問題になってきました。

<水、電気、ガス どうなってんの 「生活情報」の伝達に絞る>

17日から臨戦態勢でしのいできたが、18日の夜ぐらいになって、水の出ない自宅のことが気がかりになってくる。マンションの高層階の場合、水が出ないということは奥さんが水を運ばないといけない。初日、出てきた人間がいったん家に帰ると、翌日休ませて欲しいという人も多かったので、私自身は、18日の夜のロビーでの会議を前に部長に、撤退しませんか、もう無理ですよと言うつもりでした。ところが会議の前の会話で、スタッフの中から「うちの家はどうなっているかな、水は出ているのかな、ガスはあかんよな、電気だけきてくれたら何とかなるんだけど」、という声があがり、あ、そうやな、これやな、と思いました。水、電気、ガスなどの生活情報をやろうじゃないか。これだと外に取材に行かなくてもいいし、原稿もある程度まとめることが出来る。

当時「ライフライン」という言葉が、今のような意味で使われ始めたのは1995年の阪神淡路大震災のときからです。それまで「ライフライン」というのはまさに直訳で「生命線」「命綱」。生活に必須なインフラ設備を表す「生活インフラ」の総称として使われたのは、この震災が初めてと思います。

19日ぐらいから、地味だけど、身近な生活情報を中心に伝えていくことにして放送し始めた瞬間、電話もつながりやすくなったこともあるんですが、電話が殺到したんです。「給水所の場所を放送で伝えたそうだが、教えてほしいとか、次は給水所についての情報はいつ放送するのか、また電気はどうなっているのかとか、道路に関する情報を知りたいとか」情報が殺到して、もう生活情報だけでいこうということになりました。カメラマンには撮影は続けてくれと指示したものの、ひょっとしたら映像は放送出来ないかもしれないと思ったりもしました。

それから何とか、24時間勤務制を実施、24時間仕事をしたら、24時間休む、人のバランスをとりながら6日間、特別放送を続けることが出来ました。

<「安否情報」と放送の役割>

ところで、被災者の情報に対するニーズというのは、どんどん広がってきて、い

ちばん多かったのは安否情報でした。NHKはこのとき、NHKの教育テレビで安否情報を始めます。ただし安否情報はやってもやってもきりが無い。それにテレビというのは24時間の壁があって、延々とそんなことだけで使うよりは、もうちょっと違うことに使ったほうが良いと、私自身が思うようになってきました。NHKが安否情報をやっているのであれば、NHKに任せよう。NHKはあのとき、5万5000件ぐらいの安否情報のお願いが来て、結局2万件、積み残したと記憶しています。積み残すとあまり意味がないんじゃないかなという気がしていました。今はICT技術（情報通信技術）が発達しましたので、ICT関連の仕事かなと思っています。

とは言え、安否情報を全く無視するわけにはいかない。長田区の中学校から、生徒と連絡が取れない、何とかしてほしいという電話がかかってきたんです。そこで学校単位でやろうかということになりました。長田の何々中学校の生徒、父母の皆さん、（学校の電話番号を表示し）ここへ電話してほしい、先生が待機しています。学校は今のところ休校なので、また始まったらお知らせするので、とにかく安否を教えて欲しいというのをテロップ1枚に表示し放送したところ、今度はまた、もの凄い数の電話がかかって来ました。小学校、中学校、高校、大学と来て、幼稚園からも電話がかかる、最後は予備校からの電話でした。ただ学校単位なので、何とか情報が処理出来たかなと思っています。

<「生活情報」の表示はシンプルに>

実はこういった生活情報の放送は今までやったことがありません。まさに視聴者イコール被災者から教えてもらったと言っても過言ではないと思います。

【注】「生活情報」

交通、道路、電力、ガス、水道、電話、生活物資情報、
それに学校関係情報など

上記のような情報、例えば給水場についての表示は、テレビですからフィルター映像があって、そこに文字をスーパー表示するという伝え方をしていましたが、視聴者から、画面のバックに映像が流れると、肝心の文字（情報）が見にくく、分かりにくいという苦情電話が来ました。そこでフィルター映像に文字をスーパーするのをやめて、ブルーのバックに白い文字で「給水場〇〇」と表示することにしたのです。関係のない映像を排し、えんえんとブルーのバックに大事な情報を白い文字で示し、出し続けたのです。被災者が求めていたのはシンプルな画面表示だったんです。

生活情報の中でニーズの高かったのは、営業中の「風呂屋」情報でした。どこに、いつ行けば、風呂に入れるか、教えてほしいというのです。

コンタクトレンズを無料提供（兵庫県・眼科医会）しますというのも問い合わせが多かったですね。

公立高校入試に関する問い合わせ、この情報は高校入試が延期になるかどうかを受験生をかかえる視聴者にとっては最大の関心事でしたので「入試は従来通り実施」というテロップを出しました。

あと変わったところでは、お寺のご住職から、避難所の被災者のために「お骨一時預かります」という申し出もありました。

最初、情報が入らないときは苦悩の時間でしたが、こんなこと（風呂屋情報など）やっていて、俺、報道の人間かと思いつつも、時間を忘れて、どちらかと言えばやりがいのある、役に立つ仕事をしていた気がします。

<徹底した震災報道 独立局の強み>

これが震災から二日後 1月 19日の新聞ラ・テ欄です。サンテレビは「兵庫県南部地震情報」の文字が記されているだけで、他局に比べてラ・テ欄は朝から夜まで空白です。編成が機能していないことが新聞のラ・テ欄からもお分かりいただけるとと思います。番組欄のすべての時間帯が「兵庫南部地震情報」とぶち抜きになっていますね。

大阪のテレビ局もこういった生活情報は放送していましたが、それでも少しずつ地震発生前の番組編成に戻っています。サンテレビのような徹底した情報の流し方は出来なかったと思います。ある意味では、これはネットワークを持たない独立局の強さなんではないでしょうか。

独立局の話をしましょう。昔は独立 U 局と呼ばれていましたが、今はデジタル化で大阪の局などもすべての波が UHF になりましたので、私どもサンテレビは今独立局という風になっております。全国で 13 局ありまして、どこのネットにも属していません。13 局の間ではまあまあ“ゆるやかな仲の良さ”があつて、協力し合っているんですが、ただ資本も違いますし、関東圏と関西圏でも微妙な違いがあります。KBS 京都放送は近いこともあつて、震災時、1 チーム（人は変わりますが）しばらく常駐してくれました。大変有り難かったと思います。このように震災にシフトした編成が出来たのは独立局の強みだったなあという気がします。

<役立つ情報源 地元メディアが上位～被災者のアンケート～>

先ほど言いましたが、災害に関して放送メディアが初めて体験する大きな試練だったと言えます。それ以前の災害放送史といいますか、なかなか苦戦の連続だったようです、例えば新潟の大火（1955 年 10 月 1 日）のとき、ラジオ新潟（新潟放送）のアナウンサーが本社への類焼の危険が高まる中、マイクケーブルで体を鉄柵に縛りながら放送を続けたという伝説のリポートがあつたり、福井地震（1948

年)ではNHKで停電したのでスピーカーを積んで広報車のようにニュースを流したりとか、いろんなことがあったと聞いております。

ただ私自身は、阪神淡路大震災の場合、大阪各局も含めて非常に多様な放送、情報提供が出来たと思っております。

それが一つのアンケートにも出ています。NHK出版が発行している「放送研究と調査」(1995年5月号)によると、NHKよりにちょっとバイアスがかかっているかもしれませんが、阪神淡路大震災で役に立つ情報源は何かとの質問(仮設住宅で聞く)に対して、NHKテレビと民放テレビを合わせると断トツでテレビが支持されているという。テレビは圧倒的普及度と親しみやすさによって、やっぱりいちばん身近なメディアとして評価されたのだ。その評価に見合う放送をしたのだと、自画自賛といわれてもいい、そういう風に思っています。

【注】「放送研究と調査」は震災11か月後の12月に、第2次調査を行っている。

仮設住宅の人たちに対して実施されたこの調査では「災害関連情報の主たる情報源」として27項目をあげて、その中から三つまで選んでくださいとの設問に回答。それによると、主な情報源はテレビ103%、新聞63%、ラジオが23%、行政広報68%、町内会・近所の人19%など。

特にテレビではNHKの55%に次いでサンテレビが19%と地元メディアが被災者の主要な情報源になっていることが分かる(1996年3月号)。

<阪神淡路大震災で学んだこと>

サンテレビが阪神淡路大震災の報道を通して学んだことについて、みんなで話し合いました。どんなことを学んだか、何が出来て、何が出来なかったかを整理しようということになったんです。整理した結果が次の四つに集約されます。

- 1 生活情報 「全数」報道に徹す
- 2 被災者に役立つ 付加価値情報(を付ける)
- 3 (放送が)情報交換の場 フォーラム機能(の役割果たす)
- 4 不安あおらず デマ・流言飛語を防止

これらは、みな被災者から教えられたことばかりです。まず生活情報は、省略しないで、すべて伝える。例えば神戸・中央区の給水場を案内するとき、〇〇公園、〇〇公園など10か所と“など”という表現でその他の公園の名前を省略してしまうと、視聴者からは「給水場を全部読み上げてくれ」とクレームが来ました。さらに画面表示がよく見えなくて、音(アナウンス)だけが頼りなので、書いてある給水場所を全部読み上げてほしいと視聴者から言われ、それからはすべて読み上げるようにしました。いわゆる「全数」報道に徹したわけです。情報は省略せ

ず、全部放送するという事です。

次は被災者に役立つ付加価値情報を伝える。交通機関が復旧していく際、神戸から大阪に行くのに、阪急、阪神、JR それぞれが区間別に開通していくんです。

一つの路線が全部開通するのではなく、JRは灘まで行って、灘から、王子公園から、御影ぐらまで、御影から阪神に下りてきて、どこどこまでというようなルートがあったんです。それを放送すると、また電話がかかってくる。非常に混んでいる映像が流れると、それでは、すいている時間帯というのは何時か、実際電車に乗ったら何時間ぐらいで大阪に着くんやとか。

そこで、そういった被災者の要望に応えるため、実際に何人かの記者が駅に行って、6時間おきぐらいに並んで混雑の度合いを確かめました。

開通した区間、不通の区間だけを伝えるのではなく、待ち時間、混雑の状況まで伝える、つまり一つの情報にどんな価値ある情報を加えられるか、これが一つの勝負やなということ学びました。

さらに三つ目として（放送が）情報交換の場になる、フォーラム機能としての役割を果たす。当時、ラジオ関西がいちばんリスナーの声を吸い上げ、放送していました。透析患者のかかっていた病院が被災して困っているという放送をすると、大阪の病院から、うちは出来る、何とかここまで来られるかという電話があり、放送したところ、大阪市大病院からも受け入れの電話があり、さらに別の病院に至っては車を出してあげるという提案まであったということです。

「透析の相談所」「コンタクトレンズ」の情報交換の場を提供するというのは、大災害のときは必要だなということを確認しました。

こういった事例がいくつもあり、メディアが情報交換の場になり、フォーラム機能の役割を果たすようになっていきました。

そして四つ目は、何と言っても「デマ・流言飛語」です。ご存知の方がおられるかもしれませんが、あの阪神淡路大震災のとき、2月17日に前の地震よりも大きい地震が来るという噂が一気に広がりました。今度のは、前の比ではないとの噂が避難所に、だあーと広がりました。その対策として、専門家にスタジオでそのデマを否定してもらい、つまり権威付けをするということで、地震学者に出演を依頼、「本震より、大きい余震はない」と言い切ってもらったんです。もちろんその噂はデマで、2月17日には何も起きなかったんです。

<避難所にテレビがない～停電に弱いメディア～>

残念ながら、これも私どもサンテレビが出来なかったことです。本当に出来ませんでした。テレビメディアは停電に弱い。ワンセグ（携帯電話などモバイル向けテレビ放送）というのがありますが、通常のテレビなら電気がないと映らない。避難所には当時、テレビがなかった。今はテレビを持ち込んだり、行政が持って

きたりしていますが、阪神淡路大震災のときはテレビを持ち込むような余裕がなかったし、そんな発想もなかった。私たちが送り出した情報を避難所に届けたいのに、テレビがない、しかも停電していれば、肝心の情報は被災者に伝わらない。情報が周りに集まっているのに、真ん中が空洞化という、いわばドーナツ化現象みたいなものが起きていたんです。

避難所にどうやって情報を送り届けることが出来るか、課題を積み残したまま、結局出来なかったのです。放送メディアが、活字メディアのように情報を紙に印刷して配るということがあってもよかったか。もしくはテレビの受像機をどこかのメーカーとタイアップして避難所に配るということも考えられるが、現実にはなかなか難しいのかなと思っています。

<災害弱者 情報弱者への対応>

もう一つ、災害弱者・情報弱者の問題があります。神戸は非常に外国人が多い。働くために来ているんですが、当時長田区にはベトナム人が集まってきていました。震災時、こういった外国人にどうやって情報を伝えるか、あのとき、僕らの実力からいうと、英語でやるわけにもいかんし、中国語でやるわけにもいかん、といって字幕というのもなかったし、これはどうしようもなかったですね。今でもこれは大きな課題です。

あとは高齢者の方々です。今は携帯電話に緊急地震速報が届くようになっています。携帯電話を持っていないお年寄りはやっぱり圧倒的に不利ですね。阪神淡路大震災で亡くなった方を年齢別にみると、60歳以上が大体半分ぐらい、もう一つのヤマが実は20代前半、ほとんど大学生です。それも下宿していた学生が多く、古い住宅で地震に弱かったんでしょうね。

そういう意味でいうと、60歳以上の方々も40年以上住んでおられるわけですから、1979年の法律改正（建築基準法）以前に建てられた家がほとんどなので、耐震設計になっているかどうか。収入の格差が防災の格差につながっていると思います。それから報道のミスマッチという問題もあります。これは東日本大震災についてのアンケート調査でも指摘されています。一つの地域、一つの避難所からテレビの生中継があると、そこに支援物資がどっと集まる。そこから500メートル離れた避難所には食べるものも何もない。

阪神淡路大震災で言うと、明石というのは結構大きな被害を受けているんです。皆さん明石市が震災の被害を受けたという映像をご覧になったことがありますか。大阪で言えば、豊中市。豊中市は全壊、半壊の被害、それに亡くなった方もおられるのではないのでしょうか。豊中の被災者の方は阪神淡路大震災という名前を聞くだけで、うっとされる方が多いんじゃないですか。これこそが報道のミスマッチではないかと。神戸大学名誉教授の室崎益輝先生が今回2014年8月、兵庫と広

島を襲った豪雨被害の報道のことで怒っておられました。兵庫県内では丹波市が大雨で家屋の浸水など大きな被害を受けました。その後、広島で土砂災害がありました。今も広島の土砂災害の映像しか記憶に残っていないのではないのでしょうか。広島の土砂災害へは多くのボランティアが集まりましたが、丹波市へはボランティアがほとんど来ない状況になっています。

この報道のミスマッチというのはもっと真剣に考えないといけない問題ではないのでしょうか。

<被災者にとって「忘れられること」が最もつらい>

1995年1月17日、阪神淡路大震災が起き、この後3月20日に地下鉄サリン事件が発生、オウム真理教事件は麻原教祖逮捕へと発展していく。

そのとき、東京から神戸に応援に来ていたマスコミ関係者は一斉に東京へ引き揚げていきました。それ以降、一気に（震災関係の）報道量が減りました。

私自身は家の中がぐちゃぐちゃになったぐらいで大して被害を受けていませんが、被災者にとって、世間から忘れられることが、最もつらいことなのです。

私は、阪神淡路大震災のテーマとして、「命（いのち）」を掲げました。1996年、震災から1年目に「天国へのメッセージ」と題して、遺族の方のメッセージを取材しました。

その5年後、亡くなられた方々のインタビューを撮ってきました。このとき、先ほど触れた20代前半の大学生（下宿で死亡）の遺族を取材しました。この大学生の実家は四国の宇和島で、うちの取材スタッフが訪ねたときには、遠いところへよく来てくれたと、ずっと涙を流していたということでした。宇和島で、神戸大学に通う私の娘が阪神淡路大震災で亡くなったと言っても、それは気の毒ですねと終わってしまい、本当に過去の話になっているんですよと。もう一人死亡した神戸大の大学院生の下関の家族を訪ねたときも、そうでした。遺族、被災者にとっては、忘れられることがいちばんつらいということを実感しました。

<災害情報のプラットフォーム化>

阪神淡路大震災の後に開かれたいろいろな討論会、シンポジウムでは、ライフライン各社の広報とか、行政、防災の担当の方が「マスコミ各社が電話してきて、バラバラにいろいろなことを聞いてくるので何とかならないか」とよく発言していました。

そこで、災害情報のプラットフォーム化のようなことが出来ないかと提案しました。つまり情報をどこか1か所に集めて、それを各社で共有するといったことが出来ないかと。ところがそれぞれの局の思惑もありますし、会社の規模もあって、情報の取り扱いなどがそれぞれ異なるため、なかなかうまくいきませんでした。

それから 5 年くらい前に、総務省が「公共情報コモンズネットワーク」というのを、予算を付けてやりたいと言いだしたんです（現在は「災害情報共有システム（Lアラート）」という名称になっている）。

そのとき、私がいちばん良いパターンとして提案したのが、市町村、都道府県、中央省庁があって、しかもライフライン事業者がいて、公的な情報発信者が一つのサーバーに集まって、そこから放送事業者、新聞社、ポータルサイト運営事業者などを通じて住民に情報を伝えていくという仕組み。これでほぼ決まったんですが、結局、出来た仕組みは（災害時の）「市町村の避難勧告と避難指示のお知らせ」のところだけでした。

サンテレビはこの「避難勧告・指示」と国交省と交渉して得た河川の情報を、データ放送で出しています（通信、電気、ガス、交通、生活必需品などいわゆるライフライン等の情報は、まだこの仕組みには入っていない）。

実は情報は、市町村の担当者が入力するので、字の間違いがあるかもしれませんが、ノーチェックで出しています。放送として、いいのかどうか、ぎりぎりのラインですが、ただ「避難勧告・指示」は命にかかわることなので、特別にやろうやないかと決めました。ネット系列に入っていない強みというか、サンテレビ独自の判断で放送出来るので、私がデジタル担当のときに、データ放送などで防災情報を徹底して出していこうという方針を出していました。今年 8 月の台風するときにもデータ放送で防災関係の情報を流しました。当然、L字型のワイプを切って情報を出す画面より、密度が濃く分かりやすくなっている（データ放送の画面は、通常の番組が左下に小さく縮小、画面の大部分が防災関係の情報で埋まっている）。ここまで通常の番組を小さくして、防災関係の情報を大きく表示するのは、ネットワークを組んでいる民放キー局、準キー局では難しいでしょうね。ネットのない独立局サンテレビだから出来るのかもしれませんが。そういう意味で言うと、営業から文句を言われても、何とかやろうぜと言って押し切れるのも、阪神淡路大震災のときの経験があるからだと思います。

< 「L字画面」で災害情報を流す その賛否は >

「L字画面」で災害情報などを流すというのがいいのかどうか、なかなか難しく、やっぱりテレビを見ていると、「L字画面」が出てくるとチャンネルを別のところに切り替えちゃうとか、結構あるみたいですね。

今、大阪の各局、うちもそうですが、「L字画面」で台風情報など災害情報を出したときの視聴率がどうなるか研究しています。

今のところ分かっているのは、生番組は「L字画面」にして災害情報を出すと、結構、視聴率が上がる。ところがドラマの場合「L字画面」にすると視聴率が下がる。スポーツだと、「L字画面」にすると視聴率が下がる。

台風情報など入れたいのに視聴率が下がるということは、本末転倒というか、何のためにやっているのか分からないということです。

ただ災害情報に対するニーズというのは、間違いなくあって、NHKが災害情報に入った瞬間に視聴率がぐっと上がっています。

視聴者が求めている、しっかりした情報を出せば、視聴率に反映するものだと思います。

先日の長野県白馬村の地震ですが、NHKはすぐに特番に入りました。実はテレビ朝日系ですが、番組の途中でぶち切って、地震の特番に切り替えたのです。他局は特番を編成していません。それで視聴率がどう動くのか、見てみたい、おそらくNHKが特番に入ったので、NHKが一番かなと思います。

<私の思い メディアスクラム～神戸児童殺傷事件を取材して～>

阪神淡路大震災があったのは、1995年でした。2年後、1997年5月に神戸の須磨で連続児童殺傷事件という猟奇的な事件が起きました（中学校の正門に切断された男児の頭が放置されていた）。メディアスクラム（集団的過剰取材）の極地というような状況が起きていました。

事件が発生した神戸の須磨区近辺に住んでいる社員が相当数いましたが、自宅から地下鉄の駅に行く途中、10人ぐらいの記者から「何か見ていませんか」という質問を受けたということです。あの事件以来、子供たちの姿が町から消え、見かけなくなりました。

当時、各社がヘリコプターを飛ばしていたので、何となく阪神淡路大震災を思い出すという社員も多くいました。そして、にわかには信じられないような目撃証言がそのまま放送されたり、新聞に掲載されたりしました。黒いごみ袋を持った男が歩いていたとか、ガソリンスタンドに給油しに来た車の助手席に毛布がかけあって人が寝ていたようだとか、高速道路の草むらに男が隠れていたとか、そういう目撃証言が垂れ流しのように出たわけです。

当時、ニュースのデスクをしていて、地下鉄の駅から路上に点々と血痕があり、うちの記者も当然現場からレポート、夕方5時半からのニュースでトップニュースとして放送しています。5時45分、兵庫県警の記者会見があり、冒頭いきなり、あれはその前日にバイクで転倒した後、歩いた人の血痕で裏が取れているという電話が、県警キャップの記者から入りました。ありやと思いました、新しい情報を入れ、ニュースの時間内に訂正しました。

これはもうあかん、こんなにええ加減な情報ばかり流していたら、無限大に訂正を書かないといけなくなる。

私は、グリコ森永事件のとき、県警記者クラブのキャップだったんですが、そのときは、犯人が捕まるか、捕まらないかという無茶苦茶さで、この須磨の事件の

恐怖感をあおるようなものとは、全然、異質なものと思います。

須磨の事件については、今後、目撃証言を取材しても放送しない、その代り、今子供たちはどこで遊べるのか、子供を預かる施設があるのかを中心に取材しようと、上司に進言すると、それは、ええ話やなどと言って社内に「サンテレビは冷静に取材すること」という張り紙を出してくれました。これで冷静な報道が出来たと思っています。

少年が逮捕されたときに、各社が被害者の家に行くわけです。中継車を出す局もありました。土曜日の夜なんですけど、朝までこうこうとライトがつけっ放しでした。

サンテレビでは、被害者の家には取材に行くな、それ以降もしばらく行くなという指示を出して、被害者関連の映像の撮影を控えるように言いました。

すると最初の被害者のお母さんから、2か月ぐらいしてから電話がかかってきたんです。新聞がメディアスクラムの記事の中でサンテレビの取材態度について1行か2行書いてくれたんですが、それを読んで、そう言えば名刺をもう一度探してみたら、サンテレビの名刺だけなかったと。そこまで配慮してもらうのはありがたい話で、その後インタビューに応じていただいたようなことがありました。

ただし、取材で手を抜いたり、ひるんだりしてはならない。

災害時に、被災者が何を必要としているのか、被災者のニーズを感じとろう、さらに想像力を働かせることも必要だと常日頃、言っています。

この時期に北海道で地震が起きたら、被災地はどうなるか、ちゃんと想像しようぜと（みんなに言っています）。東日本大震災のときも想像力に欠けていました。反省していますが、（地震があったのは）3月で、東北で、水に浸かった人に喜んでもらえるにはどうしたらいいのか。やっぱり着る物しかないですよ。暖を取るかしかない。当時、ボランティアに行くのはちょっと待ってからにしよう、物を送るのは、向こうでさばき切れない可能性があるんで、物を送らずにお金を寄付しましょうというような報道が続いていました。しかし、がむしゃらにボランティアに行ってもよかったし、古着でもいいから持って行ったらよかったのではないかと思います。

<災害は“違う顔”でやって来る>

日本災害情報学会・デジタル放送学会では、福島原発事故で新潟市と新発田市に避難された方へアンケートを取っています。

「役に立つメディアは何か」に対しては、衝撃的な結果が出ています。ラジオとかテレビとか新聞よりも、電話、メール、口コミのほうが圧倒的に役立ったというのです。行政に至ってはほとんど役に立たないという回答です。

もう一つ「信頼し、利用して、評価できる情報源は何か」の設問に対しては、こ

れもロコミが圧倒的に多い。その次がインターネット、ようやくテレビ、ラジオ、新聞と続く。行政については2%と低い。これは原発で避難した人、被災者たちが行政は何か隠しているのではないか、だから信頼出来ないと受けとめたからだろう。

報道が信頼されなくなると、一気に視聴者は横を向く。逆に言えば、ロコミ、インターネットが役に立つとみなされることは、デマとか流言飛語とかが蔓延^{まんえん}する一つの原因でもある。報道機関マスコミが、情報伝達者が信頼されないと、おそらく関東大震災で起きたような悲劇がまた起きる。改めて情報というのは非常に大切なものであると思います。

災害というのは“違う顔”でやってくる。“違う顔”でやってくるから災害と呼ばれるわけです。阪神淡路大震災は家が凶器になったので、建物の耐震化があれだけ叫ばれていたのに、東日本大震災の場合、海が凶器になって、科学のシンボルだった原発が凶器になる。次は何が凶器になるか分からない。そういう意味で、災害は“違う顔”でやってくると思うのです。

それに対して私たちは、何をしたらいいのかと考えています。

医療用語で **Preventable Death** という言葉があります。防ぐことのできる死。逆に言えば、救うことのできる命（いのち）と言ってもいいでしょうか。

私は阪神淡路大震災のとき、報道のデスクでした。それまで警察担当が長くて、もともとは事件屋といてもいいデスクでした。ある程度の事件もこなしてきましたが、阪神淡路大震災には今までの経験なぞ何の役にも立ちませんでした。今まで持っていた自信なんか粉々に砕け散ったと言ってもいいでしょう。あのとき私がおもっとなんと情報を出せていたら、亡くなった6434人のうちの一人でも二人でも助けることが出来たのではという無念の思いが、今でも心の奥に張り付いています。

情報は、本当に重要なライフラインだと思います。“適時・的確・丁寧”を「情報の3T」と呼びますが、情報はグッドタイミングでの的確、しかも丁寧に出したい。理想ばかりで口だけだなと言われても、災害に強い、災害のときに頼られる放送局になりたいと常に思っています。

大先輩方を前にちょっと偉そうなこと言ってしまいました。これで私の話を終わらせていただきます。

司会 本当に凄いの話を聞かせていただきました。震災報道だけでなく、震災報道からずいぶん多くのことを学び取られ、それを生かしておられるなと感じました。私は震災のとき、まだシンガポールで仕事をしており、1月17日の時点ではこちらにいませんでした。宮田さんのお話を伺い、映像を見せていただいて、本当に驚くばかりです。

テレビ局の近くに二人しか社員がいなくて、人員確保が大変だったかと思いますが、宮田さんが車で神戸大橋まで来られて局に着くまでどれくらい時間がかかりましたか。

宮田氏 家を出たのが午前 6 時半ごろで地震発生から 1 時間弱、会社に着いたのが 9 時前でしたので 2 時間以上かかっていますね。そのうち 40~50 分歩きました。

—— 先ほど防災情報の出し方として、「L 字型画面」の話が出ましたが、家で見ていても非常に分かりにくく、そのうえ情報の出し方が中途半端ですね。

宮田氏 おっしゃる通りです。「L 字型画面」による情報伝達には目次がないんですよ。ということは、ずっと画面を見ていないと必要な情報が得られない。ルールがないので、鉄道から始まって知りたい情報にたどりつくまで、ずっとぐるぐる回っている感じでなかなかたどり着かない。生放送だと L 字型の枠から流れる情報と番組とが連動していることがあるんですが、映画とか、録画の番組では全く連動していませんので分かりにくいんです。耳で聞く、目で見ると、一体何を聞いていいのか視聴者側に戸惑いが出てくる、難しいですね。あれだと思いついて特別番組をやったほうがいいと思います。

—— 先ほどスクリーンに映し出された映像では、本番の番組が左下に小さく、「避難勧告・指示」などの防災情報は画面いっぱい大きく出ましたが、この映像はずっと出されているんですか。

宮田氏 いや、あれはデータ放送の画面で「d」ボタンを押さないと、あの画面にはなりません。時々、メインの画面に「『避難勧告・指示』は『d』ボタンを押して見てください」の文字表示をしているんです。まだ中途半端ですね。しかも今のリモコンというのは、高齢者には優しくなくて、こんなボタンがいっぱいあって、どうなってんの、みたいなことがありますね。

—— それともう一点、生活情報を、ブルーをベースにして白い文字で表記されていましたが、あれは写植ですか。

宮田氏 これは外注していましたので、担当者が一人か二人出てきてくれました。当時は出来上がったテロップを枠に入れてカルタ取りのようにして手動で送出していました。今はコンピューター操作ですので、クリックすればスーパー出来るようになっていきます。

——— あの表記はシンプルで読みやすいですね。ただ放送の弱点ですが、流れてしまって、情報をストック出来ない。結局、翌日新聞で確認する。亡くなった方の名前が一面つぶして掲載されましたが、凄く読まれたのではないか。一覧性という点ではテレビは非常に弱い。

宮田氏 テレビ、ラジオは記録性に劣る。テレビは非常につらいですね。

——— 災害情報のプラットフォーム化というのは、いいアイデアだと思っていましたが、これが成立しないのは何なんでしょうか。

宮田氏 やはりそれぞれの思惑ですね。まずライフライン事業の各社がやっぱり（情報の）更新忘れの責任を持ちたくないというのが一つあります。停電情報について、マスコミからは何世帯まで出せと言われるが、彼らにとっては地域単位でしか分からない。実はおおよその概数を発表するんですね。その概数がいつまでも残っていくのが嫌だという。あともう一つは（この作業には）手間がかかるんですよ。行政だと都道府県に報告し、町民、市民にも知らせたい、インターネットにも入れないといけない、そんな面倒なことはいやだという。プラットフォーム化をやりたいんですが、大きな壁があります。新聞各社は何やかんや言っても競争原理が徹底していますからね。

——— 朝日放送、毎日放送、読売テレビ、関西テレビも地震の後、系列から一斉に応援が入って取材体制が組まれる。サンテレビはそういう応援の体制はどうなっていたんですか。

宮田氏 全然なくて、孤軍奮闘だったんです。ただ友人だった朝日放送のデスクが6日目に、応援出すよ、食べるものも出すよ、遠慮なく言ってくれと電話がかかってくる。そのとき、私は今回だけはうちでやらせてくれ、うちのスタッフでやり遂げたい、ABCには力及ばないことは分かっているが、今回はこれでいきますと言ったら、彼が「サンデープロジェクト」のプロデューサーに電話し、その後「ニュースステーション」が1か月後にサンテレビのスタジオから中継することになるんです。孤軍奮闘でしたが、うちのスタッフは皆いい経験をしました。ただ、うちの会社もいよいよ半数以上の社員が震災報道を経験していないという状況になりました。これは最大の悩みです。あのとき応援を断ってでも、やりがい求めた気持ちが、そんなに簡単には伝わらないんですね。とにかく私たちの経験を伝えるのが最大の課題です。

—— 今日拝見した、長田区の午前中の火災の映像、サンテレビにしかない映像をもっともっと放送したらどうですか。

宮田氏 そうですね。

—— 今日はいいお話を聞かせていただき、印象深いものでした。(あの震災を) 忘れてらいかんと言われたが、今度の衆院選挙でも、何が争点か、その中に地震もないといかんですね。

宮田氏 そうですね。

—— 東南海地震が目前という状況の中でやっぱり忘れさせないために、我々もそうですが、もっともっと、言わないといかん。出来るだけあの貴重な映像をまた見せてやってください。

宮田氏 分かりました。

—— おそらく膨大な資料映像が。

宮田氏 当時、取材に出かけた5人のカメラマンが撮った分ですから、膨大というほどありませんが、よその局にはないような映像が撮れていると思います。当時、淡路島に駐在のカメラマンがいたのは、サンテレビとNHK だけだったのではないかと。そのNHKも、北淡町の映像を貸してほしいと言ってきました。

—— 来年、震災から20年になりますが、かなり大規模な編成をされるんですか。

宮田氏 (2015年) 1月17日の午前3時から11の番組を放送する予定です。今回その特別番組のトリとして、午後8時から9時30分のゴールデンタイムにドラマを編成しています。サンテレビとしては初のドラマ制作です。これは漫画なんですけど、震災を知らない女子大生が神戸に来て、神戸で震災の記憶をたどりながら、成長していくという若い人向けの、やんわりとしたドラマです。監督は白羽弥仁さんで、彼が頑張って劇場用映画も一緒に作ったんです。1月17日同時に公開することになっています。サンテレビとしては、テレビでドラマ、映画館で映画という風に二つ同時公開するという破格な取り組みです。

——— このメディアウォッチングの会では、高齢者と放送、テレビ・ラジオということについて考えてきたのですが、震災で亡くなられた方には、二つのヤマがある、つまり 60 歳以上と大学生が多かったということですが、中でも 60 歳以上の高齢者に対する情報を、どんな風に易しく出すかということは難しいですね。

宮田氏 そこは難しいですね。ただ、うちはなるべく表記の文字は大きく、字数は少なくするようにしています。

高齢者に情報、特に災害情報を伝えるということは、これは地上波テレビの仕事だと思っているんです。地上波テレビは最も親しまれているメディアですから。

——— 今日は、最初から最後まで非常にエキサイティングなお話で、私なんか特に（地震のとき海外に赴任中）何も見ていない人間ですので、興奮の連続でした。大変貴重な体験をお話いただき、ありがとうございました。

以上